

<母のこと>

倉敷青陵高校

私が通学していた高校は、岡山県立倉敷青陵高校だった。自宅の下津井(国立公園鷲羽山は今では瀬戸大橋の橋げたになっている)からは当時まだ運行していた下津井電鉄のマッチ箱のような電車で1時間、当時の国鉄バスで20分かかって毎日通った思い出が残っている。当時岡山県立高校には通学区制があり児島通学圏以外の倉敷通学圏の青陵高校に応募したのは「友達のいない高校に行きたい」という単純な思いからであった。

青陵高校は当時から「自由」の校風があり、生徒会活動や新聞部なども活発であった。漁師の田舎町育ちの私は入学して「倉敷の生徒たちはさすがによく遊びごとにも長じている」と感心したものだ。倉敷には大原美術館、倉敷レーヨン(当時)の本社もあり、私のクラスを見ても周りはアカ抜けた連中が多かったように思えた。

さて私も2年生になってからは生徒会や新聞部で何かとかかわってにぎやかな高校生活を送っていたが、体育クラブでもサッカー部に所属、レギュラーではなかったがともに汗を流した。

停学処分

私の1週間停学処分事件はこの時の2年7組でおこった。当時の机と椅子はつながっていて前後に調節することもできず、窮屈な姿勢で授業を受けなければならなかったのだが、私はその連結部分の角材を鋸で切り離して自由に前後移動できるようにした。これが職員会議で問題となり「公有財産の毀損」にあたるとして停学処分とされたのである。

今から振り返ると、職員会議で某先生グループが「新聞部の部室に『前衛』という雑誌が置いてあったが誰が持ち込んだものか」といった不穏な(どちらが不穏なのか?)兆候があったらしい。私の長兄は当時から(安保闘争の前から)民青同盟の幹部で何しろセーターの右肩に民青のS字マークを縫いこんでいたほどである。私も2年のとき兄にいて民青同盟に加盟したが、民青同盟の地区委員会で「高校生はお前一人だ」と言われたことを覚えている。そうしたことが学校側にわからないはずがなかった。

が、とにかくこの時は1週間ですんだ。そして3年の11月、生徒会室のドアが傷んでいたので学校側がベニヤ板を打ちつけていたが、それに落書きをした、というかどで今度は(前科があるので)無期停学となった。私は「勉強なら自宅でもできる」と割り切ってすごしていたが、やがて担任から「反省文を書いてだせば登校を許可する」との連絡があった。私は「反省することはあり

ません」と返事をしたが担任が言うには「お前が反省するような生徒でないことは学校中知っている。しかし大学入試も近いので形式だけ整えてはどうか」という話となり、「反省文」(何を書いたか記憶にない)を出して復学した。あとで聞いたところ校内で生徒たちが陳情署名を始める(不穏な)動きが見られたので学校側としても早めに対応したのが真相のようであった。(あとで担任から「お前が受験できなければ京大入学者が一人減ってしまう」と聞かされ「こいつらは誰のために進学指導をしているんだ!」と無性に腹が立った)

小野塚喜平次の本

さて母の話になるが、2度も処分されたことに対しては何も言わず「出る杭は打たれる。覚悟して行動するように」といった意味のことを言われた記憶がある。そして、無期停学が終わり学校に行き始めてのこと、社会科のK先生から呼び出され「山本、お母さんに借りていたこの本を返しておいてくれ」といわれて手にしたのが『小野塚喜平次 人と業績』であった。京都に出て来て記憶の片隅にあったこの本を毎年開かれている「古本まつり」で見発見したのは卒業、結婚してから十数年、多分市議員になってから後のことだったと思う。

私はこの本を読むまでは小野塚喜平次という人物が「わが国における科学としての政治学の創始者で、且つ昭和の初期に日本がファシヨ政治と戦時体制へと急ぎつつあった間、東京帝国大学総長として、大学の自治と学問の自由のために闘った」経歴の持主であり、戦後東大総長となった南原繁の師に当たる人であるということとはまったく知らなかった。それにしても疑問が残るのは「なぜ母がこの本を手にしていて、担任でもなかったK先生に?」ということである。

京都に住居をかまえて市議員となってから、岡山にもほとんど帰ることはなかったが、最後は2年間ほど植物人間となって意識不明のまま世を去った母にこの件に関して聞いてみることはついにできなかったが、この本を開く時、母がいまも「出る杭は打たれる」と語りかけているように私には思える。

高校卒業のときK先生とF先生が「山本、これを」といって私に下さったのは「第一回青陵X氏賞」と書かれた包みだった。開けてみるとA・スメドレー著「偉大なる道 朱徳の生涯とその時代」上下2巻。感激して読んだことを記憶しているが、この本は今も私の書架で大切に保存されている。今から思えばよき先生たちに囲まれていた高校時代であった。

